

# 入 域 観 光 統 計

## ( 1 ) 調査の概要

### ( 目的 )

この調査は、来県する観光客を計数的に把握し、観光関連業界等へ情報として提供するとともに、観光行政の基礎資料とすることを目的とする。

### ( 調査の方法 )

この調査は、本土・沖縄間に就航する各輸送機関の航路別月間旅客輸送実績と航空乗客アンケート調査による混在率を基にして入域観光客数を推計する。

### ( 用語の定義 )

用語の定義は次のとおりとする。

入域観光客数：来県する県外客及び外国客の数である。

県 外 客：沖縄県以外に住所を有する日本人である。ただし、本土経由で来県する外国客も含まれる。

## ( 2 ) 調査結果の概要

全国的に長引く景気の低迷により、個人消費は依然足踏み状態となっており、また、国民の旅行ニーズの多様化の中で、国内の旅行需要は引き続き厳しい状況が続いている。こうした国内旅行が伸び悩む中、平成14年の本県への入域観光客数は、航空路線の拡充や官民一体となった誘客キャンペーン(だいじょうぶさあ～沖縄キャンペーン(H13年10月～H14年3月)、Re沖縄キャンペーン(H14年4月～H15年3月))、本土復帰30周年記念事業の誘客効果(全国エイサー道ジュネー等)、大型誘客施設(美ら海水族館等)のオープン、大型コンベンションの開催、旅行商品の低価格化等により、12か月のうち8か月で各月の過去最高を更新するなど年間を通じて好調に推移し、483万4,500人と年間の過去最高記録を大幅に更新することとなった。

空海路別では、空路は469万1,100人で対前年比+9.0%(38万5,500人増)、海路は14万3,400人で同+12.2%(1万5,600人増)となった。空海路別の比率は、空路97%に対し海路が3%と航空機利用による入域観光客が圧倒的に多数となっている。

航路別では、最も多い東京が213万7,200人(構成比44.2%、対前年比+15.5%)、以下、阪神85万8,000人(構成比17.7%、対前年比+6.9%)、福岡61万6,200人(構成比12.7%、対前年比+2.4%)、名古屋38万2,500人(構成比7.9%、対前年比+11.2%)、鹿児島14万5,900人(構成比3.0%、対前年比-3.9%)となった。

外国客は18万300人(構成比3.7%)で対前年比-5.8%(1万1,100人減)となっており、その大半は台湾からの入域観光客である。外国客を空海路別に見ると、空路が7万9,100人で対前年比-27.2%(2万9,500人減)となっており、海路が10万1,200人で同+22.2%(18,400人増)となった。

月別にみると、最も多いのが8月の505,800人(対前年比+0.9%)、次いで3月の461,800人(同+7.1%)、9月の444,300人(同+11.4%)となっており、逆に最も少ないのは1月の33万4,900人(同-2.8%)、次いで5月の34万3,000人(同+1.8%)、6月の36万6,600人(同+3.2%)となっている。